



上荒井の旧館跡の土塁と堀

臣五、〇〇〇石の城主であったことは次項と、下荒井村の項で詳述する。

下小松には三つの館のあったことが記されているが、「延文の頃（一三五六〜三六〇）小松弾上包家築けりと云」とあるから、伝承としては、三十余年下荒井の築城よりは後れているが、やはり葦名に属していたものと思う。二の丸、三の丸があって、こちらも五、〇〇〇石の領主であったとも伝えるから、城というのに近かったかも知れない。他の一つには天正の頃（一五七三〜一五九一）松本源兵エが住んだとあるから、時代は遙かに下る。その詳細は小松村の項で述べる。

現在北会津村からははずれたが、古くから下、中両荒井村と関係の深かった上荒井にも下小松のものより規模のやや大きい、城というにもふさわしい館があり、葦名の臣荒井万五郎某が住んだとある。

この三つが中心になり、何れも葦名の臣として地方を護る核となり、その下に館を構えた小さい豪族がいて、それは鎌倉の中頃から室町・戦国時代にかけての、村の統治の姿ではなかったかと思う。葦名時代は長く、佐原十郎義連が文治五年（一一八九）に会津の守護に任じられてから、天正十八年（一五九〇）伊達政宗の進攻まで約四〇〇年間にわたっている。その間決して平穏ではなく、常に内攻、外攻もあって、守備態勢はゆるがせにできなかったようであるから、城および館なども、大きなものは平城の築城法にのっとり、館にも、近年までその名残りを止めていた館堀で周囲をめぐらした、所謂環濠屋敷が、各集村の中核をなしていた。盛衰もはげしかったようであるが、多くは世襲で、村の政治、特に徴税、これは主に反別に